

## 青年期の社会的態度に関する縦断的研究

— 大衆社会的態度を中心とした質的検討 —

久世敏雄 浅野敬子<sup>1)</sup> 後藤宗理<sup>2)</sup>  
二宮克美<sup>3)</sup> 宮沢秀次<sup>4)</sup> 宗方比佐子<sup>5)</sup>  
大野久<sup>6)</sup> 内山伊知郎<sup>7)</sup> 和田実<sup>7)</sup>

### I 問題

1972年度から約8年間にわたって実施された青年期の社会的態度に関する縦断的調査は、「保守的態度」「革新的態度」「大衆社会的態度」という3つの社会的態度枠組を想定して進められてきた(久世・速水, 1974, 久世・浅野・後藤・二宮・宮沢・宗方・大野・内山, 1985)。本研究は保守的態度と革新的態度に関する質的分析を行なった前報(久世・浅野・後藤・二宮・宮沢・宗方・大野・内山, 1984)に続いて、特に「大衆社会的態度」に着目し、分析を加えるものである。

ここでとりあげる「大衆社会的態度」は、1950年代後半から1960年代前半にかけてわが国で「アカデミズムとジャーナリズムをにぎわした」(中野, 1981)大衆社会論に拠っている(久世ほか, 1985)。そこでは「周囲への同調と他人志向性、『疎外』された結果としての政治的無関心, アノミーの亢進, 小市民的態度」(久世・速水, 1974, 久世ほか, 1985)などが強調される。これらの背景にはオルテガ, トックビルをはじめとし, マンハイム, デュルケーム, リースマン, フロム, コーンハウザーなどによる欧米社会学の様々な仕事を挙げることができるが, それ自体は統一的な理論モデルというよりも, むしろ現代社会を把握するための複合的なモデルと考えた方がよいであろう。

大衆社会論は, 高度産業社会化による「大衆社会状況」下での社会と諸個人の特性について論じる際, しばしばそこでの「マス・メディア」の働きと, その受け手としての諸個人の関係について強い関心を払ってきた。様々なメディアは, 諸個人がどのような対象に関心を向け, それらの対象をどのように普遍化し, 抽象化してとらえていくかに関与していくと思われる。われわれはここでは特に諸個人の関心の対象を問題にする。彼らは, より身近な対象に関心を持っているのか, あるいは, より普遍的な, または想像力を媒介として理解される「遠い」対象に関心を持っているのか。このような視点から「大衆社会的態度枠組」(久世・速水, 1974, 久世ほか1985)を再考するならば, 「周囲への同調と他人志向性(以下「同調性」とする)」は身近な事象への関心と関係しており, 「政治的無関心」はより普遍的な, または「遠い」対象への無関心と, 関連しているとみなすことができよう。

以上2つの視点にもとづき, 本研究のねらいをまず次の2点に置く。第一は, 「大衆社会化」しているといわれる現代の青年を, そもそも複合的な概念である「大衆社会的態度」枠組によってみた場合, どのような側面で「大衆社会的であり」どのような側面で「大衆社会的でない」かについての基礎的な分析を行なうことである。第二は, より日常的で身近な対象への関心と, より抽象性, 普遍性を帯びた「遠い」対象への関心(あるいは逆に無関心)と関連すると考えられるいわゆる「同調性」と「政治的無関心」とが, 大衆社会論の内でも考えられているように, 相互に関連の深いものであるのかを検討することである。これらの検討の上で, さらに, 「同調性」および「政治的無関心」がいわゆる「保守的態度」および「革新的態度」とどのような関連を持っているのかも検討する。

- 1) 中京女子大学家政学部助教授
- 2) 名古屋市立保育短期大学助教授
- 3) 愛知学院大学講師
- 4) 名古屋経済大学講師
- 5) 名古屋大学大学院教育学研究科研究生
- 6) 新潟青陵女子短期大学講師
- 7) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期)

## II 方 法

### 1 社会的態度の質問紙

社会的態度の質問紙は保守的態度、革新的態度、および大衆社会的態度を測定するために用意されたそれぞれ13項目、計39項目の質問から構成されている。質問紙作成の手続きは久世・速水(1974)に提示してある。また質問項目はTable 1(大衆社会的態度項目)および付表(保守的態度項目および革新的態度項目)に掲げた。各項目に「非常に賛成」「賛成」「賛成とも反対ともいえない」「反対」「非常に反対」という5段階評定尺度で回答を求め、それぞれ5点、4点、3点、2点、1点を与えて得点化した。項目得点という場合はこの値を、態度得点という場合はそれぞれの態度の13項目の項目得点の合計値を示し、数値が大きいほどその態度が強いことを意味する。

### 2 調査対象と調査時期

被調査者は、名古屋大学教育学部附属中学校および高等学校の生徒である。今回の分析に用いた調査対象は、1972年度に中学に入学し、1977年度に高校を卒業した男女生徒、1973年度に中学に入学し、1978年度に高校を卒業

Table 1 大衆社会的態度項目

- 1 流行語などはよく知らないはずかしい
- 2 労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない
- 3 みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする
- 4 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない
- 5 中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい
- 6 理論よりフィーリングやムードが大切である
- 7 誰が衆議員の選挙で当選しようと日本の政治はかわらないと思う
- 8 今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい
- 9 共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする
- 10 ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどろだ
- 11 いつの世でもお金がなければ幸福になれない
- 12 皆と同じような持物や服装をしていないとひけめを感じる
- 13 公害問題は被害者と加害者だけの問題である

した男女生徒、および1974年度に中学に入学し、1979年度に高校を卒業した男女生徒の3群のうち、中学1年から高校Ⅲ年まで毎年この調査をもらなく受けた男子70名、女子70名の合計140名の生徒である。

調査はクラスごとに実施した。また調査時期は各学年の年度末であった。

### 3 分析方法

(1) 項目得点の平均値の変化パターンおよび平均値の水準 大衆社会的態度の項目得点の各学年での平均値を男女別に算出し、以下のような手続きで、平均値の変化パターンおよび水準の分類をする。

i) 中学1年から高校Ⅲ年までの6つの平均値の最大値と最小値の差が0.5点以上のものを変動項目、0.5点未満のものを安定項目とする。

ii) 変動項目については、中学1年と中学2年の平均値、中学3年と高校Ⅰ年の平均値、高校Ⅱ年と高校Ⅲ年の平均値を算出し、それぞれを $m_1$ 、 $m_2$ 、 $m_3$ とする。 $m_1$ と $m_2$ の差、 $m_2$ と $m_3$ の差が0.25点以上である場合、当該の区間での上昇または下降があったとみなす。前半( $m_1 - m_2$ 間)、後半( $m_2 - m_3$ 間)の少なくとも一方で上昇がみられいずれにおいても下降の認められない項目を変動項目のうちの上昇パターンとし、前半、後半の少なくとも一方で下降がみられいずれにおいても上昇の認められない項目を変動項目のうち下降パターンとする。

iii)  $m_1 - m_2$ 間、 $m_2 - m_3$ 間で基準値(0.25点)以上の上昇または下降が認められた場合でそれぞれ中学1年から中学3年、高校Ⅰ年から高校Ⅲ年まででその上昇または下降と逆方向に0.5点以上の変動がみられる場合、およびii)で上昇または下降パターンに分類されない場合は、変動群のうち「その他」のパターンとする。

iv) 中学1年から高校Ⅲ年までの各学年の平均値の最小値が3.5点より大である場合をH水準、最小値が3.0点以上3.5点未満であり最大値が3.0点より大である場合をh水準、最大値が3.0点より大であり最小値が3.0点未満である場合および最大値、最小値ともに3.0点の場合をM水準、最大値が3.0点以下2.5点以上であり、最小値が3.0点未満である場合をl水準、最大値が2.5点未満である場合をL水準とする。

(2) 個人の項目得点変化パターンおよび、特徴的態度得点パターンを示す個人の項目得点変化パターン

個人の6年間の項目得点がすべて4点または5点である場合にその個人の項目得点変化パターンをH、1点または2点である場合をL、3点である場合をMとする。6年間に4点または5点から3点へ変化し、3点から4

点または5点への変化のない場合を\ Mとする。同様に1点または2点から3点へ変化し、3点から1点または2点への変化のない場合を/ Mとする。1点、2点または3点から4点または5点への変化があり、4点または5点から1点、2点または3点への変化、3点から1点または2点への変化のない場合を/ Hとする、同様に4点、5点および3点から1点または2点への変化があり、1点または2点から3点、4点、または5点への変化、3点から4点または5点への変化のない場合を\ Lとする。項目得点が1点から3点の間にあり、/ Mにも\ Lにも分類されないものはlとする。3点から5点の間にあり\ Mにも/ Hにも分類されないものはhとする。以上のいずれにも分類されないものは「その他」とする。各項目ごとにこれらの項目得点パターンを示す個人の数を算出する。

大衆社会的態度において6年間安定して低水準を示す個人、および一定方向へ顕著な変化を示す個人を選び出し(久世ほか, 1985), 各々での項目得点変化パターンを調べる。

(3) 項目グループ内での項目平均値および項目得点パターンと項目得点間相関

大衆社会的態度項目をその意味内容を考慮して①同調性に関する項目(大衆社会1, 大衆社会3, 大衆社会12)と②政治的無関心に関する項目(大衆社会2, 大衆社会

4, 大衆社会10, 大衆社会13), ③その他の項目(大衆社会5, 大衆社会6, 大衆社会7, 大衆社会8, 大衆社会9, 大衆社会11)に分類し, それぞれの項目グループ内の項目の平均値パターン, および項目得点パターンごとの人数を示す。また①②のグループに含まれる項目の間の相関係数を示す。

(4) 同調性に関する項目グループおよび政治的無関心に関する項目グループで特徴的な得点パターンを示す個人の態度傾向

同調性に関する項目グループの3項目でともにLパターンを示す個人(男子3名, 女子1名)およびともにHパターンを示す個人(女子1名)を選び出す。また同様政治的無関心に関する項目グループの4項目でともにLパターンを示す個人(女子1名)を選び出す。これらの個人の項目得点を, 大衆社会的態度の下位項目グループおよび, 保守的-革新的態度の下位項目グループ(久世ほか, 1984)ごとに調べる。

III 結 果

1. 調査対象者群の全般的特徴——大衆社会的態度の項目得点の平均値水準 (Table 2)

大衆社会的態度項目のうち, 項目4(法律について考えない), 13(公害は無関係), では男女とも比較的安定して低い項目得点平均値を示しており, 項目3(TV

Table 2 大衆社会的態度の態度変化パターンと態度水準

		安 定 項 目	変 動 項 目		
			↗	↘	そ の 他
男女 共通	H	2 (スト・デモ) 5 (レジャー) 6 (フィーリング) 1 (流行語) 10 (ベトナム) 12 (服装) 4 (法律) 13 (公害)	7 (選挙) 11 (お金) 9 (募金)	8 (家庭)	
	h				
	M				
	L				
男 子	H	3 (TV)			
	h				
	M				
	L				
女 子	H	3 (TV)			
	h				
	M				
	L				

Table 3 大衆社会的態度の個人の変化パターン (男子)

	個人の項目得点変化パターン (頻数)*										大衆社会的態度で特徴的パターンを示す個人															
	L	l	M	h	H	↘L	↘M	↗M	↗H	その他	安定 M <sub>1</sub> 中 中 中 1 2 3	上昇 M <sub>1</sub> 中 中 中 1 2 3	下降 M <sub>2</sub> 中 中 中 1 2 3	高 高 高 Ⅲ Ⅱ Ⅰ												
2 (スト・デモ)	1	13	4	9	0	6 <sup>(4)</sup>	0 <sup>(0)</sup>	3 <sup>(3)</sup>	1 <sup>(1)</sup>	33	2	2	2	2	3	2	2	3	2	5	4	3	1	3	3	
M 5 (レジャー)	4	16	3	7	0	6 <sup>(0)</sup>	4 <sup>(2)</sup>	1 <sup>(1)</sup>	4 <sup>(1)</sup>	25	2	2	2	2	2	2	2	2	2	5	4	3	3	3	3	3
6 (フリーリング)	1	14	8	7	1	11 <sup>(9)</sup>	3 <sup>(3)</sup>	4 <sup>(2)</sup>	8 <sup>(5)</sup>	12	3	3	3	3	2	2	3	3	2	5	3	3	5	3	4	4
1 (流行語)	6	19	7	9	0	12 <sup>(8)</sup>	2 <sup>(2)</sup>	3 <sup>(2)</sup>	3 <sup>(3)</sup>	14	2	2	2	3	3	3	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3
l 10 (ベトナム)	17	24	0	3	0	6 <sup>(4)</sup>	0 <sup>(0)</sup>	5 <sup>(4)</sup>	3 <sup>(1)</sup>	13	2	2	2	2	2	2	2	3	2	3	3	3	3	3	3	2
12 (服装)	9	17	4	9	3	6 <sup>(5)</sup>	3 <sup>(3)</sup>	4 <sup>(2)</sup>	2 <sup>(2)</sup>	13	2	2	2	2	2	1	2	4	2	4	4	4	3	3	3	1
4 (法律)	31	16	0	1	0	11 <sup>(6)</sup>	0 <sup>(0)</sup>	2 <sup>(1)</sup>	2 <sup>(0)</sup>	7	2	2	2	2	2	2	2	3	1	2	2	3	2	3	3	2
L 13 (公害)	40	11	0	1	0	2 <sup>(1)</sup>	0 <sup>(0)</sup>	6 <sup>(5)</sup>	3 <sup>(3)</sup>	7	2	2	2	2	2	1	3	4	1	2	5	3	3	3	3	2
3 (T.V.)	16	22	4	2	0	5 <sup>(2)</sup>	0 <sup>(0)</sup>	7 <sup>(4)</sup>	2 <sup>(2)</sup>	12	2	2	2	3	2	3	2	1	3	3	3	3	3	3	3	1
7 (選挙)	2	11	1	8	5	1 <sup>(0)</sup>	1 <sup>(0)</sup>	3 <sup>(1)</sup>	8 <sup>(5)</sup>	31	3	3	2	3	3	3	1	3	5	4	5	4	5	4	3	4
↗ 11 (お金)	1	14	1	8	2	1 <sup>(1)</sup>	1 <sup>(0)</sup>	4 <sup>(4)</sup>	10 <sup>(5)</sup>	28	2	2	2	2	2	1	1	2	3	2	3	2	3	5	3	3
9 (募金)	6	23	2	3	1	5 <sup>(3)</sup>	0 <sup>(0)</sup>	13 <sup>(0)</sup>	4 <sup>(0)</sup>	13	2	3	3	2	2	4	2	1	1	2	2	5	3	3	3	4
↘ 8 (家庭)	0	4	2	17	3	13 <sup>(7)</sup>	8 <sup>(7)</sup>	1 <sup>(0)</sup>	2 <sup>(1)</sup>	20	3	3	3	3	3	3	4	5	5	5	4	5	2	3	3	4

\* ( ) 内の数字は変化が一定方向にのみ生起している個人の頻数を示す。

Table 4 大衆社会的態度の個人の変化パターン(女子)

変動項目	個人の項目得点変化パターン(頻数)*										大衆社会的態度で特徴的なパターンを示す個人																						
	L	l	M	h	H	↘L	↘M	↗M	↗H	その他	MF1			MF2			MF3			MF1													
											中	中	高	中	中	高	中	中	高	中	中	高	中	中	高								
2 (スト・デモ)	1	8	5	22	0	8	2	1	4	19	2	4	4	3	2	2	3	3	2	3	3	3	3	3	3	5							
M 5 (レジャー)	4	17	1	14	3	4	3	1	7	16	3	1	3	1	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3	4	5							
6 (フライリング)	2	16	11	10	5	4	1	5	4	12	2	1	1	3	1	2	2	2	2	2	3	3	3	4	3	3							
1 (流行語)	5	21	7	14	2	5	4	0	4	8	2	1	1	1	1	2	3	4	2	3	1	1	1	1	1	1	4						
10 (ベトナム)	10	23	0	3	1	4	0	12	2	15	3	2	2	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	3	3						
12 (服装)	5	17	3	11	3	5	2	4	1	19	1	1	1	1	2	2	3	2	4	2	1	1	1	1	1	3	4	3	3	4			
3 (T.V.)	5	24	4	8	1	9	3	5	1	10	1	1	1	1	2	3	3	2	2	1	1	1	1	1	1	2	1	3	2	2			
4 (法律)	27	22	1	1	0	7	0	6	0	7	2	1	1	1	2	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2	2	4	3	3	3	3	
13 (公害)	42	10	2	1	0	1	0	10	0	4	1	2	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2	2	3	3	3	3	3	
7 (選挙)	1	9	2	6	5	2	3	4	13	25	3	4	4	5	4	3	1	1	2	2	3	2	4	4	3	4	2	2	3	3	4	3	4
11 (お金)	4	10	5	12	2	2	0	9	14	12	3	3	3	4	3	1	3	2	4	2	2	3	3	2	2	4	2	3	4	5	5	5	
9 (募金)	15	15	4	1	0	1	0	24	3	7	2	3	3	2	3	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	1	2	2	3	5	5	5	
8 (家庭)	2	8	3	11	11	10	4	2	3	16	3	2	3	3	2	5	4	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	1	1	1

\* ( ) 内の数字は変化が一定方向にのみ生起している個人の頻数を示す。

をみないと取残される)でも男子は安定して低い項目得点平均値を示している。一方項目2(スト, デモには無関心), 5(政治よりレジャー), 6(理論よりフィーリング)などの項目では男女とも安定して比較的高い項目得点平均値を示している。また項目7(選挙で政治は変わらない), 11(お金がなければ幸福になれない), 9(募金などは避ける)では男女とも項目得点平均値が上昇し, 項目8(家庭の幸福が大切)では下降している。

以上のような結果から, 調査対象者群の全般的傾向を要約してみると, 彼らは全般には大衆社会的態度は低く, この傾向は, 法律, 公害などの問題へのいわゆる「社会的, 政治的無関心傾向」の低さとして示されている。しかしながら, 現実の社会の「スト, デモ」や, いわゆる政治問題を真剣に考えるという訳ではなく, またその背景にある社会・政治理論にもなじみにくさを感じている。6年間に選挙への信頼感はずすれていき, 「平凡な家庭のささやかな幸福」に依拠しようとする気持ちも少なくなり, 一方で, 金銭を重視する傾向が増大していく。

## 2 調査対象者群の6年間の項目得点変化パターンの特徴 (Table 3, 4)

項目得点平均値の水準との対応に着目してみると, 安定項目で項目得点平均値がL水準にある項目4(法律について考えない), 13(公害は無関係)では個人の態度変化パターンでも, Lパターンを示すものが多く, その割合は38%から60%に達している。一方, 項目得点平均値がM水準にある項目2(スト・デモには無関心), 5(政治よりレジャー), 6(理論よりフィーリング)の各項目ではLパターンを示す個人はきわめて少ない(6%以下)。男子では特に, このうち項目2(スト・デモには無関心), 5(政治よりレジャー), の2項目では個人のレベルでみて方向の明確でない大きな変化を示す「その他」の変化パターンが多いことに特徴がある。また項目得点平均値が上昇していく項目7(選挙で政治は変わらない), 11(お金がなければ幸福になれない), 9(募金などは避ける)では個人の変化パターンでも↗Mパターン, ↗Hパターンが比較的多くみられ, 平均値が下降していく項目8(家庭の幸福が大切)では, ↘Lパターン, ↘Mパターンが比較的多くみられる。項目7(選挙で政治は変わらない)では男女とも「その他」の変化パターンが多いことも特徴である。

## 3 大衆社会的態度得点で特徴的な変化パターンを示す個人の項目得点およびその変化 (Table 3, 4)

大衆社会的態度が6年間安定して低い水準を示している個人の場合, 項目得点平均値がL水準にあった項目4

(法律について考えない), 13(公害は無関係)では男女いずれも安定して低い項目得点を示している。しかし, 項目得点平均値がM水準にある項目や, 上昇あるいは下降パターンを示す項目群のうちのいずれかにおいても, 安定して低い項目得点を示す事例があるなど, 大衆社会的態度得点で安定して反大衆社会的であると目される事例の項目得点は, 調査対象者群全体の平均的な傾向と, 一義的に対応してはいない。

大衆社会的態度得点が増加パターンを示している個人の場合, 項目得点平均値が増加パターンを示している項目のうちいずれかでは項目得点が増加傾向を示しているほか, 項目得点平均値からみた安定項目においても, 項目得点が増加傾向を示す項目がみられる。

大衆社会的態度得点が増加パターンを示している個人の場合, 項目得点が増加傾向を示す項目はすべて, 調査対象全体の項目平均値が安定傾向を示している項目であった。

以上のように, 大衆社会的態度得点で特徴的な変化パターンを示す個人の項目得点は, 調査対象者群全体の項目平均値の水準と変化パターンとは必ずしも対応してはいない。

## 4 同調性, および政治的無関心関連項目群の項目得点変化パターンの特徴, および項目間関連 (Table 5, 6)

同調性に関する項目群, 政治的無関心に関する項目群, その他の項目群に分けてみると, 同調性, 政治的無関心に関する項目はいずれも調査対象者群全体の項目平均値では安定傾向が高く, 項目2(スト・デモには無関心)という例外を除けば平均値水準も低い。個人の項目得点でもLパターンまたはHパターンを示す割合も高い。調査対象者群全体の平均値でみて, 上昇や下降などの変化傾向を示している項目は, 同調性, 政治的無関心に関する項目以外のものである。

次に同調性に関する項目群と政治的無関心に関する項目群の項目間相関係数をみると, 同調性に関する項目3項目の間, 政治的無関心に関する項目4項目のうち項目2(スト・デモには無関心)を除く3項目の間ではかなり高い相関がみられる。特に女子では同調性に関する項目間の相関が6年間一貫して有意であり, 男子では項目2を除く政治的無関心に関する項目間の相関が6年間一貫して有意である。一方同調性に関する項目と, 政治的無関心に関する項目の間の相関関係は, 安定せず, 全体としては低い水準にとどまっている。

以上のことから, 身近な事象へのある種の関心の持ち方を示すと思われる同調性は, 低く, 政治的事象への一

Table 5 同調性, 政治的無関心, その他の項目の項目得点変化パターン

項目	男 子										女 子												
	と平均値水準	個人レベルの変化パターン										と平均値水準	個人レベルの変化パターン										
		L	l	M	h	H	↘ L	↘ M	↗ M	↗ H	その他		L	l	M	h	H	↘ L	↘ M	↗ M	↗ H	その他	
同調性	1	l	6	19	7	9	0	12	2	3	3	14	l	5	21	7	14	2	5	4	0	4	8
	3	l	16	22	4	2	0	5	0	7	2	12	l	5	24	4	8	1	9	3	5	1	10
	12	l	9	17	4	9	3	6	3	4	2	13	l	5	17	3	11	3	5	2	4	1	19
政治的無関心	2	M	1	13	4	9	0	6	0	3	1	33	M	1	8	5	22	0	8	2	1	4	18
	4	L	31	16	0	1	0	11	0	2	2	7	L	27	22	1	1	0	7	0	6	0	7
	10	l	17	24	0	3	0	6	0	5	3	13	l	10	23	0	3	1	4	0	12	2	15
	13	L	40	11	0	1	0	2	0	6	3	7	L	42	10	2	1	0	1	0	10	0	4
その他の	5	M	4	16	3	7	0	6	4	1	4	25	M	4	17	1	14	3	4	3	1	7	16
	6	M	1	14	8	7	1	11	3	4	8	12	M	2	16	11	10	5	4	1	5	4	13
	7	↗ M	2	11	1	8	5	1	1	3	8	31	↗ M	1	9	2	6	5	2	3	4	13	25
	8	↘ M	0	4	2	17	3	13	8	1	2	20	↘ M	2	8	3	11	11	10	4	2	3	16
	11	↗ M	1	14	1	8	2	1	1	4	10	28	↗ M	4	10	5	12	2	2	0	9	14	12
9	↗ l	6	23	2	3	1	5	0	13	4	13	↗ l	15	15	4	1	0	1	0	24	3	7	

一般的な関心はかなりあるが、相互の関係は比較的独立したものであると思われる。

5 同調性および政治的無関心に関連する項目群で特徴的なパターンを示す個人の社会的態度の分析

(Table 7)

同調性が低く政治的無関心傾向は低い事例CfM 2では政治社会に関する項目のうちすべてで革新的—反保守的な態度を持つようになるが、性役割、親子関係、上下関係に関する項目群では革新的な態度と保守的な態度とが混在している。このような傾向は、同調傾向の低い他の事例CfM 1, CfM 3, CfF 1にも現われている。一方政治的無関心傾向が低いが、同調性は目立って低い事例PIF1では、このような保守的な態度と革新的態度の混在はみられない。しかしながら、同調性が高く、しかも政治的無関心傾向が目立って低くはないCfF 1

の事例では、保守的および革新的態度項目で構成されたいずれの項目群においても、態度は一貫性と明確性を欠いている。

IV 考 察

大衆社会的態度の項目得点の基礎的分析によれば、本研究の調査対象群は全般的にみて、法律への関心、公害問題への関心の高さという点で非大衆社会的であり、ストライキやデモへの無関心、政治に対するレジャーの重視、理論に対するフィーリング・ムードの重視という点でやや大衆社会的であり、また選挙に対する無効感、金銭の重視、募金の拒否などの諸傾向の上昇という点で、全般に大衆社会化していく傾向があった。

また同調性と政治的無関心を中心とした分析によれば、それらは一般に期待されるような一義的な関連を持ってはいなかった。しかしながらこの同調性と政治的無関心

Table 6 同調性・政治的無関心項目群の項目間相関

	男			女		
	同調性		政治的無関心	同調性		政治的無関心
	大社1	大社3	大社2	大社4	大社10	大社12
中1	0.55***					0.56***
中2	0.51***					0.44***
中3	0.61***					0.55***
大社3 高I	0.52***					0.57***
高II	0.65***					0.42***
高III	0.74***					0.50***
中1	0.41***	0.56***				0.39***
中2	0.19	0.19				0.39***
中3	0.38***	0.23				0.28*
大社12 高I	0.66***	0.32**				0.36**
高II	0.54**	0.46***				0.35**
高III	0.63***	0.67***				0.64***
中1	-0.08	0.04	-0.10			0.00
中2	0.34**	0.32**	0.25*			-0.08
中3	0.01	-0.02	-0.02			-0.11
大社2 高I	0.02	0.01	-0.13			-0.10
高II	0.03	0.03	0.16			0.09
高III	0.09	0.14	0.36**			0.11
中1	0.25*	0.27*	0.27*			0.07
中2	0.21	0.15	0.10			0.21
中3	0.18	0.11	0.15			-0.01
大社4 高I	0.46***	0.29*	0.40***			0.20
高II	0.30*	0.34**	0.19			0.10
高III	0.21	0.28*	0.33**			0.21
中1	0.26*	0.37**	0.19	0.13	0.39***	0.30*
中2	0.14	0.19	0.21	0.14	0.39***	0.09
中3	0.07	0.06	0.15	0.37**	0.38***	0.26*
大社10 高I	0.28*	0.08	0.18	0.48***	0.32**	-0.23
高II	0.01	0.24*	0.00	0.06	0.33**	-0.06
高III	0.16	0.30*	0.27*	0.44***	0.45***	0.22
中1	0.28*	0.27*	0.12	0.16	0.24*	0.21
中2	0.27*	0.13	-0.05	0.00	0.58***	0.01
中3	0.15	0.09	0.04	0.38**	0.24*	0.09
大社13 高I	0.28*	0.17	0.17	0.29*	0.55***	-0.10
高II	0.26*	0.30*	0.19	-0.02	0.54***	0.13
高III	0.21	0.38***	0.27*	0.29*	0.48***	0.10
中1						0.16
中2						0.15
中3						0.00
大社13 高I						0.27*
高II						0.18
高III						0.24*
中1						0.16
中2						0.15
中3						0.00
大社13 高I						0.27*
高II						0.18
高III						0.24*



Table 7 同調性および政治的無関心について特徴的な事例\*

事例	同 調			政 治 的 無 関 心			性 役 割				親 子 関 係					上 下 関 係					伝 統 的 的 対 人 関 係				家 族 = 国 家				政 治 社 会						
	大社1	大社3	大社12	大社2	大社4	大社10	大社13	保守2	保守6	保守13	革新10	保守6	保守7	保守13	革新4	革新13	保守1	保守3	保守8	保守10	革新7	保守5	保守12	革新2	革新3	保守3	保守6	保守11	保守13	保守1	保守11	保守12	革新6	革新9	
CfM1	中1	2	2	1	5	4	1	1	c	R	r	C	R	C	r	R	R		c	R	C	R	R					R	R	r	R	R	r	R	
	中2	1	1	1	3	2	1	1	r	C	R	C	C	C	R	R	R		c	r	c	r	R	R					C	R	R	R	R	r	r
	中3	1	1	1	3	1	2	1	r		r	r		c	r	r	R	R		r	R	c		R	r					r	r	R	r	r	R
	高I	1	2	2	3	1	1	2			r	r		c	r	R	R	r		r	r	c		r	r					r	r	r	r	r	
	高II	2	1	2	3	2	2	1				c	c		r	R	R	r	c		c		R	r	r				r	r	R	r	r		
	高III	1	1	1	4	1	2	2			C	c	c	C	r	R	r		c	c	c	r	r	r					r	C	r	r	r	r	
CfM2	中1	2	2	2	3	2	2	1			r	c			r	r	r	r	r	c	r			r	r	r	r	r	r	r	r	c			
	中2	2	2	2	3	2	2	2			r	c	c	r	R	r			c	r			r	r					r	r	r				
	中3	2	1	2	3	1	2	2	c			c				r	r	r		r	r	r	r					r	r	r	r	r			
	高I	1	1	1	3	2	3	3	r			c	c	r	r	r	r	c	c	r	r	r	r	r	r	r	r	r	r	r	r	r			
	高II	2	1	1	2	2	2	3		r		c	r	c	r	R	r	r	c	c	R	r	r	R	r	r	r	r	r	r	r	r	r	r	
	高III	1	1	1	2	2	3	3		r	r	c	r	c	r	r	r		c	r	r	r	R	R					r	R	r	r	R	r	r
CfM3	中1	1	1	1	4	1	1	1	R		r	R	C	r	R	R	R	c	R	C	R	c	R				R		r	R		R			
	中2	1	1	1	3	1	2	1	R		r		C	r	R	r	R	R	c	R	c	r	R	R				R		r	R	r	r	r	
	中3	1	1	1	3	1	1	1	R				C	r	R	R	C	R	c	R	R	R				R	r	R	r	R	R				
	高I	1	1	1	1	1	1	1	R	c	R	c	c	C	R	R	R	R	C	R	c	R	R	R				R	c	r	R	r	R	R	
	高II	1	1	1	3	1	2	1	R				c	R	r	R	c	r	c	R	R	r				R	r	r	r	R	r	R			
	高III	1	1	1	2	1	1	1	R	r	R	r	r	c	R	R	r	R	R	C	R	r	R	R	r				R	r	R	R	R	R	
CfF1	中1	4	5	5	3	3	3	1	R	c	r		c	c	r	R	r	c	R	c		R	r	c	R	r	R	c	R	r	R	r			
	中2	4	5	4	3	1	2	1	R				c				R	c	c	R	C	r	r					R		r					
	中3	4	4	4	2	2	2	1	r				c		r		R	c	r								R								
	高I	5	4	4	3	2	3	2	R				C				R	C	r	c		r	R												
	高II	4	4	4	4	2	2	2	R				C					c	r								r	r	r						
	高III	4	4	4	3	2	2	1	r	c			c	C			r	r	C	c	r	c				r	c		r						
CfF1	中1	1	1	2	3	1	2	2	R	r	r	r			r	r	R	c	r		r	R	r	R	r	R	r	r	R	r	r	r	r	r	
	中2	1	1	1	3	2	1	1	R	r	r	r	c	r	r		r		r		r	R	r	r	r	R	r	r	r	R	r	r			
	中3	1	1	1	3	2	1	1	R	r	r	r	c	r	r	r	r	c	r	R				r	r	R	r	r	r	R	r				
	高I	1	1	1	2	2	2	1	R	r	r	r	r	c	r	r	r	r	c	r		r	r	r	r	r	R	r	r	r	R	r			
	高II	1	1	1	3	2	2	1	R		r	r	c	r	r	R	r	c	r		r	r	r	r	r	R	r	R	R	r	r				
	高III	1	1	1	3	2	2	1	R	R	r	r	R	c	r		r	R	c	r	r				r	r	R	R	r	r	R	r	r		
PIF1	中1	2	3	3	2	1	1	1	R	R	r		R	r	r	r	R		r		r	r					R	R	r	r	r	r	r		
	中2	2	2	3	1	1	1	1	R	R			R	r	r	R	R		R	c	R	r					R	R	R	R	R	R	R		
	中3	2	3	2	1	1	1	1	R	R			R			r	R	r									R	R	R	r	R	R	R		
	高I	3	2	2	1	1	1	1	R	R	r		R	r	r	r	r	R	r	r		R	r					R	R	R	r	r	R	R	R
	高II	3	3	3	2	1	1	1	R	R			R	r	r	r	R		r		R	r					R	R	R	r	R	R	R	r	
	高III	2	2	2	1	2	1	1	R	R			R		r	r	R	r	r		r	r					R	R	R	r	R	r	r		

\* 表中R, rは各項目における革新的回答を, C, cは保守的回答を示す。それぞれの大文字は項目回答のうち「非常に賛成」「非常に反対」に対応し, 小文字は「賛成」「反対」に対応する。

とは、相互の組合せによって、いわゆる保守的および革新的態度の構成に微妙な影響を及ぼしている可能性があることが、特徴的事例の分析から示唆された。すなわち、反同調的であつ政治的関心の高い場合には、政治社会的レベルでは明確な一貫性のある態度を示すが、日常生活レベルの事象に対しては、このような一貫性を必ずしも期待できない。しかし中庸な同調性が、強い政治的関心に裏うちされた場合には、社会的態度は広範に構造化され、一貫性のあるものになる場合がある。ところがさらに強い同調性が、政治的無関心と重なると、社会的態度は明確さと一貫性とを欠如しがちである。もとより、いわゆる大衆社会論は大衆社会的人間像の対極にヨーロッパ近代の「内部志向型 (inner-directed types)」の人間像 (Riesman, 1961) を置いてきた。同調性の否定、強い政治的関心および責任意識という反大衆社会的人間特性は、これを背景にしたものであった。このような大衆社会的人間像、および反大衆社会的人間像は、ここで分析した事例を手がかりにしながら、再検討される必要があるだろう。

## 文 献

- 久世敏雄・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・大野 久・内山伊知郎 1984 青年期の社会的態度に関する縦断的研究——保守的態度、革新的態度に関する質的検討——名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 31, 25—41.
- 久世敏雄・浅野敬子・後藤宗理・二宮克美・宮沢秀次・宗方比佐子・大野 久・内山伊知郎 1985 青年期の社会的態度に関する縦断的研究——個人の変化過程の分析——教育心理学研究, 33, 11—21.
- 久世敏雄・速水敏彦 1974 中学生・高校生の社会的態度に関する研究 (I) 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 21, 1—11.
- 中野 収 1981 大衆社会論の錯誤 経済評論 30(1), 39—51.
- Riesman, D. 1961 *The Lonely Crowd*. Yale University Press.

(1985年7月31日 受稿)

## 付 表

## 保守的態度項目

- 1 国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい。
- 2 女が政治などに口だしすべきでない。
- 3 結婚は家柄を重んじなければならない。
- 4 伝統や習慣は尊重すべきである。
- 5 世間をわたるには義理や人情が最も大切である。
- 6 長男が家をつぐのは当然だ。
- 7 親孝行は子どもの義務である。
- 8 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい。
- 9 学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである。
- 10 世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない。
- 11 日本は天皇を中心にまとまるべきである。
- 12 デモヤストでさわぐのは民主国家の恥である。
- 13 家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい。

## 革新的態度項目

- 1 個人の自由は尊重すべきである。
- 2 正しいことであれば世間体など気にすべきではない。
- 3 いくら恩義のある人でも筋道のおらない頼みごとは断った方がよい。
- 4 社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである。
- 5 いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである。
- 6 デモヤストをするのは労働者の当然の権利である。
- 7 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する。
- 8 男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない。
- 9 政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである。
- 10 家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである。
- 11 「方角が悪い」などということはまったく信用しない。
- 12 結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい。
- 13 家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである。

ABSTRACT

A LONGITUDINAL STUDY OF SOCIAL ATTITUDES OF ADOLESCENTS

— Mass-social attitudes in 1970's upper and lower secondary school students —

Toshio KUZE, Keiko ASANO, Motomichi GOTO, Katsumi NINOMIYA, Shuji MIYAZAWA,  
Hisako MUNEKATA, Hisashi OHNO, Ichiro UCHIYAMA, and Minoru WADA

The purpose of the present study is to describe the development of mass-social attitudes of adolescents.

Longitudinal data of adolescents were collected with conservative, radical, and mass-social attitude scales; each scale had 13 items respectively. The subjects consisted of 70 boys and 70 girls in upper and lower secondary school. They started the school in three different years (in 1972, 1973, and 1974) and graduated 6 years later (in 1977, 1978, and 1979, respectively), but they were combined into a single group. Each subjects was monitored in 6 successive years at 1-year intervals. Certain components of mass-social attitudes were focused on the purpose of the analyses.

Major results obtained are summarized as follows.

- (1) Feelings of inefficacy in the politic situations and feelings of reliance upon money increased with age.
- (2) Other directedness is independent of political apathy and, in certain case, coexists with highly organized social attitudes.